
ねえ、ぶっちゃん

紅波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねえ、ぶっちゃけ

【Nコード】

N3071F

【作者名】

紅波

【あらすじ】

花も恥じらう乙女の会話――とあるファミレスで繰り広げられるぶっちゃけトークは、日本を背負う探偵+αをもぶった斬る!?

「ぶっっちゃけさあ、」

微睡むような秋の午後。

大通りに面するファミレス窓際の席——自分の目の前の女がチョコレートパフェをつついていたスプーンをびしっと此方に向けてきたので、手元でゆらゆらと香りを載せた湯気を立ち上らせていたキラメルカプチーノを何とはなしに眺めていた志保は、顔を上げた。

「志保ちゃんはどうがいいの？」

掛けられた問いに、どう返そうか困っていると、志保の隣にいたもう1人が呆れたようにため息を吐いた。

「由美だったら！どれが、なんて物じゃないんだから、」

日々忙しく人々のため世の中ため働いている警察官にとって、たまの休みは貴重だ。久々に取れた休日、由美と美和子は、志保も誘ってショッピングに繰り出していた。

2人のやり取りにくすり、と笑った志保を見て、由美は本当に綺麗な子だなあとしみじみ思う。最近同僚の美和子を通して仲良くなつたこの女の子は、交通課の由美には知る由もないがなんだか訳ありのようで、一時期本庁でよく見かけた——ブラック・インパクトと

呼ばれ、世界中を震撼させたあの大事件が明るみになった時期に。世間がおさまりを見せてからも、彼女のことは度々目にした。なんでもあの名探偵工藤新一の助手らしく（高校生なのに助手がいるなんて非常識だが、もともと感覚がズレているのかもしれない）、目暮警部は新たな希望の星の登場に大層ご機嫌らしい。

美和子に紹介されて、こうして3人で出かけるまでになってから、由美が志保に関して知り得たことはほとんどない。

知っていることと言ったら、彼女が賢くて美しい、人を惹きつけて止まない人物であること、阿笠博士の家に住み込んでいること、

——そして現在進行形で4人の男がその魅力にオチて、彼女に猛アピールを繰り返しているということ。

「私に選ぶ権利なんて無いもの」

カプチーノにひとくち口を付けてから、志保はさらりと言う。

「だいたい、あの人達もこんな女のどこがいいのか理解できないわ」

肩を竦めてそう言った志保に、美和子は、そんなことないわよと笑ってみせる。

「見る目はあると思うわよ？工藤くんも、服部くんも、白馬警視総監の息子さんも、あと、黒羽くんだけ？」

「そんなこと……あの人達なら引く手数多でしょうに。4人がかりでいい迷惑よ」

「ええー？なんで？どれも将来有望なイケメンばかりじゃない！
選り取り見取りよ！」

志保ちゃん贅沢ー、と唇を尖らせる由美に、むしろ欲がないのよと
志保は笑う。

「こーなったら、今日ここで選んじやいましょ！私がセールスポイ
ント挙げてくからさ！ね！」

「セールスポイントって、だから物じゃないんだから！」

美和子のツツコミをよそに、由美はどんどん押し進めていく。

「ではではー…エントリーNo.1——工藤新一くん！高校
生にして解決した事件は数知れず、日本警察の救世主、平成のホー
ムズの異名を持ちます。クールで純粋、母親譲りの美貌に、ちょ
ーっと気障だけどサマになるスマートさ！普段はサッカー好きで実
力は超高校級！親は世界的ベストセラー作家と元女優というこれ
またワンダフルな経歴。ただしホームズオタク」

「……………」

「…あんだどこで調べたの…？」

かなり詳細な情報に志保は目を丸くし、美和子はげんなりしている。

「エントリーNo.2——服部平次くん！同じく高校生探偵の浪花
の熱血青年！大阪府警本部長の息子にして剣道は全国大会上位の常
連、明るく活発、男くさくって人情派。大阪弁の楽しいトークであ
なたを元気づけること請け合いよ！凛々しくって頼りになるしね。」

ただしたまに厚かましくも感じます」

「……つまり厚かましいと思ったことがあるのね？」

志保が面白そうにカプチーノをまたひとくち飲んで静かにいう。

「うつ……え、エントリーN o . 3——白馬探くん！同じく高校生探偵だけど日英世界を股に掛け活躍するグローバルかつ知的で紳士的なフェミニスト、父親はご存知警視總監という血統書つき！甘いマスクの王子的ルックスでそつなくあなたをエスコートしてくれるはず。ただしバアコン」

「なにバアコンって」

「ばあやコンプレックス」

「……………」

無言になった美和子に、さあどんどん行くわよーと由美はさらに突き進む。

もう少し声を押さえてほしい。周りの視線を気にして目を走らせたが、由美たちよりも、つい先程盛大に音を立ててカップを倒してしまったらしい後ろの席の客の方に注目がいつているようだった。

「エントリーN o . 4——黒羽快斗くん！明るくお茶目で甘えん坊、人懐っこい好青年。ところが実はIQ400の頭脳派というこのギャップ！巧みな話術と特技の華麗なマジックであなたを喜ばせまあす！ただし魚料理は作ってあげも口にするとどこるか目にできま

せん」

「なんで警察に関係ない一般人まで詳細にチェックしてるの…？」

呆れを通り越して一種の不安を感じ始める美和子だった。

「細かいことは気にしない！ざっとこんなもんね！さあ、志保ちゃんどう？」

「……………どうといわれても…」志保が言い澀んでいると、座っている席の道路に面したガラス張りが、コンコンと音を立てた。

「あら、」

「オメー動揺しすぎだろ」

ウェイトレスから受け取ったおしぼりでテーブルに零れたコーヒーを拭き取りながら、工藤新一は声を潜めて言った。

じろりと正面に座る、先程コーヒークップを見事にひっくり返した茶髪の青年——白馬探を睨むと、せやせや、と色黒で野球帽を被った平次が右隣から割り込んでくる。

「名探偵が聞いてあきれで、尾行もろくにできへんのかい」

「な、そう言いますがね、バババ、バアコン…っ、だいたい君たちだってフォークとり落したり咽せたりしてたじゃないですか！」

「シッ！白馬うつさい！今俺の番なんだから黙ってよ！」

人差し指を口に当て、やはり声を抑えて、白馬の右隣で椅子の背もたれに耳を寄せ、隣の席の会話をしきり越しに聞き取るうとしているのは快斗だ。

「お、…そうそうIQ400…ヨシ！マジックも言ってくれた！…って欠点そこかよ！確かに食べねえし見るのもイヤだけど！」
聴覚を研ぎ澄ませるために目を閉じて、しきりの向こうの声に相槌をうつ。

「っーかなんで俺だけルックスの説明省かれちゃってるわけ？こんなイケメンなのにさー」

「いや、だって自分、工藤と顔変わらんやん」

「おい、オメーらもうちょい声抑えろ。なんか目立ってるし気づかれんだろーがっ」

言うまでもなく、この無駄に優秀な頭脳を持ち、無駄に容姿のいい4人が揃って座っているのは、志保たちがいるファミレスの、しかも彼女らの隣のテーブルである。今日も今日とて愛しの彼女のハートを射止めるためライバルたちを出し抜こうと、偶然を装って彼女と出会すべく休日の彼女を尾行していたのだが、得てして考えることは同じだったらしく結局ファミレス前で鉢合わせて4人仲良く相

席することになったのだ。

どーする声掛けるかいいいやこのままとりあえず待って店出たところで偶然と見せかけて…などと話し合っていたところに、隣から聞こえてきたのが、由美の『THE 志保ちゃんの恋人候補選んじやいまショー』（快斗命名）である。

「——静かに！志保さんが答えるかもしれませんが、聞き逃すわけにはいきませんよ！」

「は、言ってる。宮野が選ぶのは俺に決まってるんだろ」

「ねえ、新一その自信どっからくるわけ？」

「そーいやこの前工藤がネエちゃんのチーズケーキ食べてもうたの、モノごつつ怒っててんもんなあ」

「ああ、確か1日80個の限定モノのケーキですよ。阿笠博士のぶんまで食べたとか」

「な、バ、バーロー、だからってそれくらいで…」

「『もうあの人はやってられないわ』って言ってたよなあ」

「ぐっ…いちいち宮野の声に似せんな！」

声を潜めるのも忘れぎやあぎやあと騒いでいると、新一らの席の横を、見知った少年が通り過ぎた。

「あ」

「あれって…」

「…光彦オ？」

少年は、彼らに気づくことなく店の奥——志保たちの席の方へ、歩いていく。

「こんにちは、志保さん、佐藤刑事、由美さん、」

光彦は、礼儀正しくお辞儀をすると、にこりと笑って挨拶した。

「こんにちは、円谷くん。今日は1人なのね」

笑返して志保が聞くと、光彦はハイ、と頷いた。

「ちょっと図書館に行つてまして。帰ろうとしていたら、3人をお見かけしたので…」

照れたようにはにかむ。

「あら、もしかしてお勉強？偉いのね」

美和子が感心するように言うと、いえ、と光彦はまた笑ってからふと思い出したように、

「あーそうだ、あの…これ…この前、図工の授業で作ったんですけど…」

そう言つて鞆から何か取り出すと、おずおずと3人に差し出す。

「まあ！綺麗！」

光彦が差し出したのは、コスモスの押し花をラミネート加工した栞だった。

「家は、母も姉も本をあまり読まないの…宜しかったら、もらつていただけませんか？」

「え、もらつてもいいの？」

「はい、せっかく作ったので、3人に使って頂けると、あの、嬉しい、です、」

「…ありがとう、円谷くん」

礼を言われて恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに笑つて、それじゃあ僕は用事がありますのでと光彦はもう一度お辞儀をして去つていった。

今度会つたときになにかお礼をしなきゃ、と考えていた志保は、由美が俯いて震えているのに気がついて訝しんだ。

「…由美さん？」

「由美？」

「——なんて…っ、…なんていい子なの！」

「は、」

「ピュア！ピュアよ！一言で言うならピュアそのものよ！」

「ちょ、由美、声おつき！」

「見た？あの礼儀正しさ！素直さ！謙虚さに健気さ！お姉サンずきゆんときちやったっ」

「コラコラコラ！」

「しかも小学生なのに休みの日まで図書館で自主勉なんて将来有望だわ！志保ちゃんっ、あの子よ！あの子で間違いないわっ！ちよつと年の差はあるけど、そんなもの！恋人にするならあの子よ絶対！」

「あんた仮にも警察官が…小学生よ？犯罪だから！」

志保ちゃんもなんとか言っただけでよ、という美和子に、志保はくすりと笑った。

「そうね…確かに円谷くんなら、恋人としては申し分ないわね」

——ガタタツ

「だれかさんみたいに人のケーキ勝手に食べたりしないでしょっし、」

——がちゃんっ、

「だれかさんみたいに家中、鳩だらけにしないでしょっし」

——ずるっ、

「だれかさんみたいにたこ焼きのソースでソファにシミつけないでしょっし、」

——ずべしゃっ、

「だれかさんみたいに部屋一面に薔薇の花びら敷き詰めるなんてはた迷惑な演出もしないでしょっし」

——ちーーーーん…

そのとき、美和子の携帯が鳴った。

「はい、佐藤ですが…ええ…わかった、すぐ行くわ」

どうやら呼び出されたらしく、ごめん今日はこれで、と佐藤は慌てて立ち上がる。

「あら、急いでるなら送ってくわよ？美和子電車でしょ？」

「本当に？助かるわ、由美！ごめんなさいね志保ちゃん、また今度埋め合わせするから！」

そう言つてウインクして、お代をテーブルに置くと美和子たちは店を出て行つた。

2人が消えて、先程の騒がしさが遠のいて店内にかかるBGMがすかに聞こえてくる。

「……………で？」

隣のテーブルで耳をすませていた4人に、その一文字が落ちる。あまりにも突然のことに、一瞬志保は一体なにを言っているのだろうと同時に考える。

「どうして天下の高校生探偵3名と平成のルパンたる怪盗さんがそろいもそろつてこんなありふれたファミレスで仲睦まじいうら若い女性の会話をこそそそと盗み聞いているのかしら？」

全く持つて難解な謎ねえ？そうは思わない？

優しい声音で囁く彼女。しかし恋する4人にはわかった。その言葉に潜むどす黒く氷点下な彼女の本心が。

「あちゃー…」

「バレとる…」

「…はは…」

「さすがと言っべきか…」

「一応、言い分だけ聞いてあげるわ」

「『『『参りましたー！』『』『』』」

「せいぜい円谷君を見習うことね、」

言い捨てると、伝票をもってさっさと行ってしまった志保に、テール前でひれ伏した4人の男だけが残されたのだった。

後日、円谷少年が不審な視線に悩まされ警察に相談に行ったのは、また別の話である。

F i n

光っちゃんはいいい男になる説ブツシュ。初登場時はスネオ的なネチネチキャラにしかみえなかつたんですがどうしたもんかなコレ。でも実際この4人に求愛されたら志保姉さんでなくとも（むしろ姉さんでない）いろんな意味で疲れてしまうと思います。紅波が書く白馬はなぜかイタいキャラになってしまっマジック。ごめんね探たん。お粗末様でした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3071f/>

ねえ、ぶっちゃけ

2010年10月28日08時33分発行